

いつき ぼさつ わさん (齋菩薩和讃) 全文

きみよう ちようらい かこみらい [婦命頂礼過去未来]
げんざい さんせの ぶっぽうそう [現在三世の仏法僧]
うじよう ひじようの しょうゆ生(じょ)の [有情非情の衆生(しゅじょう)の]
さんぼう きえの くどくにて [三法帰依の功德にて]
志(し)ののめ わけて くないの [東雲分けて紅の]
しんによの つきが ろっこんの [真如の月が六根の]
まどを てらすと かまへたる [窓を照らすと構え(構江)たる]
いつき ぼさつの 御由来(ごゆらい)は [齋菩薩の御由来は]
いまを さること 四百年(よんひゃくねん) [今を去ること四百年]
ゆうよの むかしに さかのぼり [有余の昔に遡り]
ゆめと つたはり まぼろしと [夢と伝わり幻と]
つたはり 来(き)たる ぶつぼさつ [伝わり来たる仏菩薩]
としは きようとく ねんかんに [年は享徳年間に]
さいごう いつきと 名(な)もたかき [西郷齋宮と名も高き]
平塚(ひらつか)やまの 城主(じょうしゅ)にて [平塚山の城主にて]
きんでん ぎょくろに おはしまし [金殿玉露におわしまし]
くちには うみやま ひみをはみ [口には海山美味を食み]
きんしのう りようらを みにまとひ [錦糸の綾羅を身にまとい]
ふそくの ねんは なかりしが [不足の念はなかりしが]
ますます うきよを かへりみて [ますます浮世を省みて]
にんげん わずか 五十年(ごじゅうねん) [人間わずか五十年]
ふつき くらすも 夢(ゆめ)のうち [富貴暮らすも夢のうち]
志(し)ようを うけたる われわれは [生を受けたる我々は]
志(し)ようろう びょうしの 志(し)くありて [生老病死の四苦ありて]
おもう ころと もろともに [思う心ともろともに]
ろくじん はらう まんげつは [六塵払う満月は]
こずえを わけて うちのぼり [梢を分けてうち上り]
いまひと こえは あをぞらの [いま一声は青空の]
つきが ないたか ほととぎす [月が鳴いたか時鳥]
志(し)だい 志(し)だいに ほのかなる [次第次第にほのかなる]
はるを のせくる うぐひすの [春を乗せ来る鶯の]
こえの あやをも ありそへて [声の綾をもあり添えて]
にしきと みゆる 山(やま)のべの [錦と見ゆる山の辺の]
さかりの はなの したかげに [盛りの花の下影に]

ちぐさの はなも ここかしこ	〔千草の花もここかしこ〕
やれにし きしの くさがくれ	〔やれにし岸の草隠れ〕
つづれ させとて なくむしの	〔綴れさせとて鳴く虫の〕
あわれも つゆも いとせめて	〔哀れも露もいとせめて〕
ことはり ふかき 秋（あき）のくれ	〔理深き秋の暮〕
そうおく おしょうと 名（な）も高（たか）き	〔春屋和尚と名も高き〕
めそう ちしき たびのとに	〔名僧知識、旅の途に〕
かけがわ にしの二瀬川（ふたせがわ）	〔掛川西の二瀬川〕
みずの あじこそ ただならん	〔水の味こそただならん〕
かはかみ さして のぼりゆく	〔川上指して上りゆく〕
みやもと みやまの 谷（たに）のそこ	〔宮元御山の谷の底〕
めだき おだきの かたわらに	〔雌滝・雄滝の傍らに〕
だいばん じやくに あらはれて	〔大磐石に現れて〕
びくにと みえし けしんそう	〔比丘尼と見えし化身僧〕
ほのかに こえを はりあけて	〔ほのかに声を張り上げて〕
いちをう こんりう いたせよと	〔一字を建立いたせよと〕
そうおく おしょうに ゆうげんし	〔春屋和尚に有言し〕
おほりを つけしと おもううち	〔終わりを告げしと思ううち〕
ごしきの くもが たなびいて	〔五色の雲がたなびいて〕
ありあり てんじょう なしたまひ	〔ありあり天上なしたまい〕
いまに つたはる 法泉寺（ほうせんじ）	〔今に伝わる法泉寺〕
そうおく おしょうの かいそなり	〔春屋和尚の開祖なり〕
そのとき さいごう うちとのが	〔そのとき西郷氏殿が〕
いまこそ 志（し）きの きたるなり	〔今こそ時期の来たるなり〕
ぶっぼう きへの めじるしに	〔仏法帰依の目印に〕
かひきと なりて のちのよに	〔開基となりて後の世に〕
せじんを すくふ ちかいたて	〔世人を救う誓い立て〕
しくせい がんの わたしぶね	〔受苦誓願の渡し舟〕
ほだい ねはんの かのきしべ	〔菩提涅槃のかの岸边〕
そのみわ わたり たまふなり	〔その身は渡りたまふなり〕
ふんぼは かまへの はなのさと	〔墳墓は構江の花の里〕
さんひやく ねんの そのむかし	〔三百年のその昔〕
とづか 五郎大夫（ごろうだゆう） ただはるが	〔戸塚五郎大夫忠春が〕
そせんと なして まつりける	〔祖先となして祀りける〕
志（し）るしと みへて 忠春（ただはる）が	〔印と見えて忠春が〕
ふうふの なかに 女子（じょし）をあげ	〔夫婦の仲に女子を挙げ〕

その名（な）を	あい女（じょ）と	名（な）づけたり	〔その名を愛女と名付けたり〕
うまれ	ついたる	かをかたち	〔生れついたる顔かたち〕
たとへ	がたなき	うつくしき	〔例え難なき美しき〕
かをは	やよいの	はなにこび	〔顔は弥生の花に媚び〕
まゆは	むつきの	あをやなぎ	〔眉は睦月の青柳〕
かみは	そしゆうの	くもをこめ	〔髪は初秋の雲を籠め〕
ふようも	ねたむ	はだへにて	〔芙蓉も妬む肌（はだえ）にて〕
こえの	すずしき	なつのに	〔声の涼しき夏の夜に〕
まつの	かぜにや	かようらん	〔松の風にや通うらん〕
ときしも	てんしょう	ねんかんに	〔時しも天正年間に〕
しよだい	しょうぐん	とくがわの	〔初代将軍徳川の〕
いえやす	こうの	めにとまり	〔家康公の目に留まり〕
あい女（じょ）を	つぼねに	めしたまふ	〔愛女を局に召したまう〕
二代（にだい）	しょうぐん	ひでただを	〔二代将軍秀忠を〕
なんなく	しゅっさん	ましまして	〔難なく出産ましまして〕
御年（おんとし）	三十（さんじゅう）	八（はち）のはる	〔御年三十八の春〕
のべの	けむりと	たちたもう	〔野辺の煙と立ちたもう〕
なむ	いつき	だいぼさつ	〔南無、斎大菩薩〕
なむ	いつき	だいぼさつ	〔南無、斎大菩薩〕
なむ	いつき	だいぼさつ	〔南無、斎大菩薩〕

「いつき ぼさつ わさん」の本文は平仮名です。
郷土史家、中山正清氏に漢字を宛てていただきました。

(2023.6)